

絵本太功記十段目 尼ヶ崎の場

近松柳、近松 湖水軒、近松 千葉軒の合作。寛政12年(1800)11月、大坂中山次郎座(角の芝居)で初演。豊臣秀吉の「太閤記」を劇化した「絵本太功記」全13段のうちの10段目、俗に「太十(たいじゅう)」呼ばれている段です。座頭(ざがしら)は主役の光秀、立女形は操、花形は十次郎、若女形は初菊、老役は皐月と、役に応じて一座の役者をうまく割り振ることが出来、さらに久吉・正清を加えて多彩な顔ぶれが揃えられることから、よく襲名披露の演目に使われてきました。

さて、武智(明智)光秀は主君小田春永(織田信長)に領地を没収されたのをうらみ、天正十年(1582)6月2日、本能寺に夜討ちをかけて春永を自害させてしまいます。この知らせを聞いた真柴久吉(羽柴秀吉)は、備中高松城の毛利方と和議を整え、急ぎ光秀討伐のためとって返してきました。

舞台は尼ヶ崎の場です。尼となった皐月(光秀の母)の住む竹藪の庵室で、皐月と操(十次郎の母)は出陣する孫の十次郎のために、許嫁の初菊と結婚式をあげさせ、祝言と初陣の杯を交わします。

十次郎が出陣していくと、光秀が旅の僧に化けた久吉を追って登場します。光秀は隠れているはずの久吉を槍で一突きしますが、意外にもその槍にかかったのは母の皐月でした。皐月は苦しい息の下で、主君を討った光秀を諫めます。

妻の操の「これ見給え、光秀殿」から「せめて母ごのご最期に、善心に立ち帰ると、たった一言聞かしてたべ」と哀願に、浄瑠璃がく拝むわいのと手を合わし、諫めつ、泣きつ一筋に、夫を思う恨み泣き>と重ねていく下りは、名場面としてよく知られています。

誰もが動転しているところへ、戦で重傷を負った十次郎が帰ってきて、苦しみながらも「親人、ここに御座あつては危うし、危うし。一時も早く本国へ、サッ、早く」と促します。<深手を屈せず父親を、気遣う孫の孝行心。聞く老母は聞きかねて>の浄瑠璃が入り、皐月が「あれを聞いたか嫁女。その身の手傷は苦にもせず。極悪人の倅をば、大事に思う孫が孝心。ヤイ光秀、子是不憫にはないか。可愛いとは思わぬやい」と光秀を責めます。

進退窮まった光秀の前に、久吉とその部下の加藤正清(加藤清正)が現れますが<ただ一戦に駆け崩さん>と、後日天王山で相まみえることを誓い、光秀を見逃してやるのでした。婚礼のめでたい席から、一転して悲劇で終わる結末。強がる光秀の心中は如何に・・・。

